広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『赤い鳥』とその時代
Author(s)	武藤，清吾
Citation	フランス文学 ， 32 ： 42 - 51
Issue Date	2019-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048128
Right	
Relation	

『赤い鳥』とその時代

武藤　清吾（琉球大学）

1　はじめにー『赤い鳥』の創刊ー

月刊児童雑誌『赤い鳥』は、鈴木三重吉によって 1918（大正 7）年 7 月に創刊され、1936（昭和 11）年 10 月号をもって三重吉の死去により終刊となった。

『赤い鳥』は 1929（昭和 4）年 3 月号で休刊し、1931（昭和 6）年 1 月号から再刊した。この休刊期間を挟んで前・後期に分けられる。前期『赤い鳥』は市販され、後期は会員制販売となった。刊行冊数は、前期 127 冊、後期 69 冊である。1923（大正 12）年 10 月号は関東大震災により、12 月号は雑誌組合の協定で休刊となったため合計で 196 冊の『赤い鳥』が刊行された。

創刊号は 78 ページの菊判で、定価 18 銭。表紙題字「赤い鳥」のロゴマークは手書きされ、上段に「鈴木三重吉主幹」と冠された[1]。本文にカラーページはなく、口絵が三色刷、表紙裏の広告、目次が単色刷カラーであった。当時の国定尋常小学校国語教科書が 10 銭前後から 20 銭であったことを考えると安くはないが、金額的にも内容的には充実していたと考えられる。最盛期には 3 万部を超える部数を発行した。全国の子どもたち、教師、保護者、市民に、童話、童謡、外国作品の再話を提供する一方で、綴り方、童話、童謡、自由詩、自由画、曲譜を全国から募集して毎月の誌面に掲載した。また、通信欄を充実させて、読者と交流する欄も設けた。

こうした呼びかけが児童による自覚的な創作と鑑賞の実践を呼び起こして、全国に多くの書き手を育てることに成功した。児童文学作家の坪田譲治、新美南吉、童謡詩人の巽聖歌、与田準一、歌人の木俣修らが誕生し、童謡の作曲家も輩出した。「ごんぎつね」（新美南吉）、「からたちの花」（北原白秋）、「かなりや」（西條八十、初出「かなりあ」）など、現在までの教科書に収められた作品も少なくない。『赤い鳥』の成功は、『金の船（金の星）』『童話』などの児童誌、『鑑賞文選』[2] などの競合誌も多く生み出し、近代児童文学と作文教育の基礎を確立するうえで大きな貢献をした。

『赤い鳥』創刊から 100 年が経過した現在でも『赤い鳥』の影響は大きく、活発な研究が多くの学問分野で続けられている[3]。特に、生活綴方、語彙、挿絵、美術、音楽、メディア、再話などの分野で研究が広がっている。近年では、菅邦男『『赤い鳥』と生活綴方教育ー宮崎の児童詩と綴方ー』（風間書房、2009）、出雲俊江『峰地光重の教育実践ー学習者主体教育への挑戦』（溪水社、2016）、山田実樹「『赤い鳥』における語彙の研究」（広島大学学位論文、2014）、周東美材『童謡の近代―メディアの変容と子ども文化』（岩波書店、2015）、中内敏夫『綴ると解くの弁証法ー「赤い鳥」綴方から「綴方読本」を経てー』（溪水社、2012）、渡辺貴規子『『家なき子』

の原典と初期邦訳の文化社会史的研究　エクトール・マロ、五来素川、菊池幽芳をめぐって』（京都大学学位論文、風間書房、2018）などの研究が公刊された。

本稿では、『赤い鳥』の軌跡を確認して、その刊行の意義を再評価したい。また、『赤い鳥事典』（柏書房、2018）の研究成果をもとに『赤い鳥』研究の今後の方向性について考えたい。『赤い鳥事典』は、「違う研究分野の者たちによる多角的・多面的な研究成果を集大成して、これから100年の基礎資料となる事典を作り、次世代に渡す役割を果たしたい」、「研究者だけでなく、子どもの文化に関心のあるすべての人に届けたい」という意図で刊行された。

2『赤い鳥』の特徴

(1)「赤い鳥」の標榜語（モットー）

『赤い鳥』巻頭には「「赤い鳥」の標榜語（モットー）」が掲げられ『赤い鳥』の基本精神を公表した。そこでは「現在世間に流行してゐる子供の読物の最も多くは、その俗悪な表紙が多面的に象徴してゐる如く、種々の意味に於て、いかにも下劣極まる」と断じ、「こんなものが子供の真純を侵害しつゝある」と批判する。

続いて、「世俗的な下卑た子供の読みもの」の排除、「子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力」の結集を掲げ、「若き子度のための創作家の出現」期待した「一大画期的運動の先駆」と自己規定する。

さらに「全誌面の表現そのものに於て、子供の文章の手本を授けんとする」ものであるとして、「今の子供の作文を見よ」「子供も大人も、甚だしく、現今の下等なる新聞雑誌記事の表現に毒されてゐる」と述べている。また、「「募集作文」は、すべての子供と、子供の教養を引受けてゐる人々と、その他のすべての国民とに向つて、真個の作文の活例を教へる機関である」と喧伝する。

そして、賛同作家として、「泉鏡花、小山内薫、徳田秋聲、高浜虚子、野上豊一郎、野上弥生子、小宮豊隆、有島生馬、芥川龍之介、北原白秋、島崎藤村、森森（ママ）太郎、森田草平、鈴木三重吉其他、十数名」を掲げている[4]。

これらの文言は『赤い鳥』が現代文化の批判と革新を目指した対抗文化の運動として出立したことを示している。表紙絵、読みもの、作文に言及しながら、当代の劣悪な文化を超克する意欲に満ちた表現からは、新文化建設の決意を感じさせ、子どもたちの教育組織である学校文化への批判も垣間見せている。実際、『赤い鳥』誌上では、学校教育の模範作文の模倣や実用文の練習、臨画、学校唱歌を批判して、綴り方、自由画、童謡の募集を粘り強く行った。表紙絵についても、従来の児童雑誌の「俗悪な表紙」を批判して、新進画家清水良雄を抜擢して表紙や口絵、挿絵の従来のイメージを刷新している。

「募集作文」についても、「子供の教養」の育成に関心を持つ人々に開かれた実践体としての「機関」雑誌になるという自覚が創刊時からあった。「真個の作文の活例」には、正岡子規によって提唱され、河東碧梧桐、高浜虚子、夏目漱石らの写生文芸の流れにあることが含意されている。三重吉は若いうちから俳句に興味を持ち写生文に関心を寄せていた。「文章雑話」(『鈴木三重吉全集』第五巻、p. 124）では、「現在の表現の根本の刺激は写生文である。私は、写生文の「真実」を好いたのである」と述べ、「生地のまゝの口語」で「修飾も誇張もなしに、目に見えた通りの事実をその儘記載した、質実な純朴な活現」に「興味を持つた」と書いている。

(2)『赤い鳥』の誌面構成

『赤い鳥』の誌面構成は、以下のように作家による創作欄、読者による創作投稿欄、通信欄の三つに大別される。年ごとの編集姿勢の変化や前期・後期の違いがあるものの、創刊時から終刊までこの基本姿勢には変化がなかった。

〇表紙、目次・扉など……表紙・広告・「赤い鳥」の標榜語（モットー）（後期「赤い鳥会員名簿」）目次・扉・口絵・写真・曲譜

Ⅰ　作家による創作欄……詩・創作童話・童話・創作童謡

Ⅱ　読者による創作投稿欄……推奨（入選）創作童謡・入選創作童謡・児童自由詩・推奨（入選）創作童話・入選創作童話／子供芝居・童話劇・少年少女劇／推奨曲譜・募集作文・入選綴方・模範綴方・地方童謡

Ⅲ　通信欄……通信・少年少女・賛助読者名簿

〇裏表紙……奥付・社告・広告・裏表紙

誌面に創作投稿欄を常設することで読者に書くことを勧め続けている。子どもだけでなく大人にも投稿を勧めた。復刊第1号(1931・1)から4号までの奥付蘭には、「読物の御提供」として「会員中の大人の方々や、入会児童諸君の御父兄の方々」には「専門家もおありになり、特種のお話をおもちになつてゐる方々」も多数おられるであろうから、童話、歴史、地理、科学、修養、体育、遊技の話などを寄稿してほしいと呼びかけている。これは都市中間層や市民の教養形成が進んできていることを意識したものであり、彼らが主体的な表現の場を求めることも念頭においた発言と捉えることができる。また、先に見たように口語表現であることも重要であった。ここに三重吉の編集者としての能力の高さを見ることができるのである。

(3)『赤い鳥』掲載作の特徴

本節では新しい研究をもとに、その掲載作の特徴を見ておきたい。

一つは、三重吉がエクトール・マロ原作 *Sans famille*（1878）を翻案して「ルミイ」の題名で 1932 年 11 月号から 1936 年 10 月号まで連載したことである。渡辺貴規子（2018）は、坪田譲治「鈴木三重吉の気魄」1938・7）の記述から、当時法政大生の

仏文学者蛯原徳夫を家庭教師に死の数日前まで翻訳を続けたことを紹介している。三重吉は呼吸困難を伴いながら「机に向つて、ルミーの訳業を続け」たものの、「ルミイ」は未完のまま『赤い鳥』最終号に遺稿として掲載された。渡辺は、「ルミイ」（1934・2）の前書きの「仏語からの最初の日本完訳としてまとめようとおもひ直し」たという記述から、三重吉が完訳への意志を持っていたと述べる。また、「英訳も参照した可能性が高い」と推測して、「原作の社会小説の要素も省略せずに翻訳した点は、「ルミイ」以前の *Sans famille* の翻訳とは一線を画す」特徴があったと指摘している。そして、「三重吉が原作の厳しい場面も省略せず、再話ではなく逐字訳に近い形で表した」理由について、以下のように述べている。

> 昭和初期の日本児童文学ではプロレタリア芸術運動の影響、リアリズム童話の出現が見られ、童心主義に基づく「赤い鳥」運動は限界を迎えていた。遺稿となった「ルミイ」の翻訳からは、三重吉自身が童心主義の限界を感じ取り、社会的な要素も児童文学作品の中に含むべきものと判断したとは言えないだろうか（『赤い鳥事典』、p. 122）。

そして、三重吉が逐字訳と再話の間で揺れたのは、「表現に対するこだわり」とともに「昭和初期の日本児童文学の中で、『赤い鳥』が占めるべき位置についても三重吉は考慮していたのかもしれない」と指摘して、「*Sans famille* という非常に現実主義的な一面を持つ作品」の選択も当時の児童文学の状況に起因している可能性があると述べている。渡辺の考察には推測も含まれてはいるものの、三重吉が子どもたちの生活現実を描く児童文学の登場やプロレタリア運動の高揚などに目を向けたこと、読者の読みたいものを提供する姿勢が感じられることを指摘している点は『赤い鳥』の性格をめぐる議論として重要な問題提起として受けとめたい。

また、酒井晶代の童話に関する研究（『赤い鳥事典』、pp. 129-130）では、『赤い鳥』の編集過程で、三重吉の編集姿勢に変化が生じていることがわかる。酒井は、芥川、藤村、未明などの作品、王子や王女、魔女や妖精が登場する作品が多いと思われがちだが、「説話的なものから小説的な作品まで、西欧を舞台とする物語からインド、中国種まで、リアリズムからファンタジーやナンセンスまで、伝記・歴史譚から科学読物まで、実にさまざまな作品が「童話」として誌上を飾った」と述べている。また、「創刊号の三重吉「ぽッぽのお手帳」や島崎藤村「二人の兄弟」を嚆矢として、有島生馬「泣いて褒められた話」（1918・8）、江口千代「世界同盟」（1919・3）、伊東英子「弱虫」（1919・4）など日本を舞台とした現代物が創刊時から掲載され」ており、読者から募集した創作童話でも現実的な作品が推奨されたことも指摘する。

そして、1920 年前後からの童話掲載作の内容について「号を追うにつれ、子どもを取り巻く社会状況をも射程に収めることとな」った特徴を指摘している。特に「1920 年前後からは孤児や働く子どもを主人公とする作品も数多く発表され」、叔

父に酷使される加藤武雄「めぐりあひ」（1922・6）、親方に折檻される孤児を描いた宇野浩二「天国の夢」（1923・8）、鍛冶屋の娘による孤児いじめが夢で裁かれる長田秀雄の童話劇「地獄極楽」（1920・10）、旧植民地で日本人の家に住みこみ働く10歳の中国人少女を描いた平方久直「線路」（1935・7）をあげている。これらは、1920年代から30年代に『赤い鳥』の編集が大きく変化してきたことを示している。期せずして、「社会的な要素も児童文学作品の中に含むべき」（渡辺）、「子どもを取り巻く社会状況をも射程に収める」（酒井）と評価されたことは、三重吉の問題意識として社会問題を誌面に積極的に反映させる意図があったことを示唆している。

この時期は、第一次世界大戦終結・米騒動（1918）、株価暴落・戦後恐慌（1920）、ワシントン講話条約後の失業深刻化（1922）、関東大震災（1923）、金融恐慌（1927）、世界大恐慌（1929）が続き民衆生活は疲弊状況であった。労働運動も活発化して、地方各地でのストライキも頻発した。経済危機打開のための侵略戦争を準備する動きもあり、1931年には満州事変が起こる。子どもたちの生活も厳しくなり、経済格差や児童労働も重大な社会問題となっていった時代であった[5]。『赤い鳥』の読者層である都市中間層にも影響が及んだことは言うまでもない。1929年には『赤い鳥』も世界恐慌の影響を受けた読者急減から休刊に追い込まれた。読者参加を編集方針としてきた三重吉は、こうした状況を踏まえて社会問題を機敏に捉えた内容を誌面に反映させることで、子どもたちの生活への関心を深めていったのである。

3 『赤い鳥』の運動と経営

（1）赤い鳥音楽会・自由画大展覧会の企画

『赤い鳥』は各種イベントも計画した。1919年6月、山田耕筰のアメリカからの帰国を記念して「赤い鳥音楽会」を帝国劇場で開催し、1925年4月には新宿園で「自由画大展覧会」を開催した。同展には日本や海外各地から2万点の応募があったという。新宿園は箱根土地株式会社の遊園地であり、同社は三重吉らと「赤い鳥児童劇歌劇学校」の設立も計画していた。

自由画は山本鼎によって選考され、1920年1月号から掲載された。「通信」欄には「日本ではじめて、氏の主宰の下に長野県の神川小学校で開かれた、「自由画展覧会」の状況を語られた記録は、日本に於ける自由画宣伝の策源として永久に保伝さるべき好個の国民的記念」と山本の自由画提唱の意義を三重吉が述べている。山本は4月号から選評を始め、6月号から、子どもたちの童話、自由詩投稿欄にも子どもたち自身の自由画を清水良雄らの挿絵に代わって掲載を始めた。この「自由画展覧会」は、1919年4月に開催され1万点の応募で大成功したと言われている。

周東美材（2015）は、三重吉の計画について次のように述べている。

明治期までの殖産興業と富国強兵といった国家的枠組みのなかでの開発とは異なり、大正期において大衆、とりわけ新中間層の生活風景を作り上げていったのは種々の情報と交通のメディア企業であった。鈴木三重吉が児童劇学校を設立しようとしていた郊外のユートピアは、寡占的なメディアと空間資本、とりわけ巨大な開発資本の力が不可欠だった。三重吉の嗅覚は、確実に消費社会の台頭を捉えていたのである（『赤い鳥事典』、p. 120）。

周東は、『赤い鳥』は従来「芸術至上主義的」と評価されてきたが、「開発資本と積極的に結び付」き、「新たな消費空間」をつくり、「近代的な都市空間の「夢」が提示」しようとしたことも見る必要があると指摘する。

(2) 広告戦略

広告戦略にも注目すべきものがあった。創刊号の表紙裏には、三重吉の『世界童話集』全 10 集、裏表紙裏には『三重吉全作集』の広告が載せられ、「千鳥」など全 13 巻が紹介され、さらに本舗伊東胡蝶園「御料　御園白粉（みそのおしろい）」島崎藤村『幼きものに』（実業之日本社）、日本橋白木屋呉服店の広告を載せている。

三重吉の著書購入に結びつける企てに加え、島崎藤村『幼きものに』、白粉、百貨店、鋳金、登山という「世界（西洋）」が強く意識される広告で本文を挟んだ。その後も、三越呉服店、保々近藤合名会社、大日本国民中学会、森永ミルクキャラメルの広告、2 年目からは、ライオン歯磨、マツダ電球、丸善、プラトン万年筆、シャープ鉛筆、学生帽、体温計、小児薬、ドロップ、レコード、蓄音機などの広告が出されていく。

『赤い鳥』は、世界（西洋）、家庭、婦人、教育、出版、健康、文化、スポーツをキーワードに多数の近代広告が掲載された、実に巧みに計算されたメディアであったのである。読者層として選ばれているのは、当時の新しい家庭、教育熱心で西洋文化に影響を受けやすい母親と子ども、学校の教師たちであった。日本における資本主義経済の進展によって生み出されてきた市民層の子どもたちが購読者になることで、子どもの世界でも消費者としての読者がつくられたのである。彼らは古い家制度を否定して、新しい家族を形成する意志を持っており、『赤い鳥』の読者になることはその意志を表明することでもあった。

4 「教養実践」としての『赤い鳥』

(1)『赤い鳥』を誕生させた文脈

『赤い鳥』は突然出現したものではない。これまでも三重吉の娘すゞのために発行した「鈴木すゞ伝説」、経済的理由（桑原三郎）などが刊行の理由とされた。これらは三重吉の言説や彼の家庭をめぐる経済状態などから推測された議論であった。しかし、当時の児童雑誌出版の文脈からは、『赤い鳥』の刊行が子どもの教養や文化をめぐる現状を考慮したものであることがわかる。

『赤い鳥』以前に刊行された児童雑誌には、コドモ社『コドモ』『良友』、婦人之友社『子供之友』などがあった。文化性に富む良心的な児童雑誌で、童話、絵話などを掲載した。また、『愛子叢書』（実業之日本社、1913・14）の島崎藤村『眼鏡』、田山花袋『小さな鳩』、徳田秋聲『めぐりあひ』、与謝野晶子『八つの夜』、野上弥生子『人形の望』が三重吉に影響を与えたとする見解もある[6]。『赤い鳥』創刊に影響されて『おとぎの世界』『こども雑誌』『金の船』『童話』が刊行された。これらは1910年代から20年代の代表的な児童雑誌となった。『金の船』は齋藤佐次郎の編集、島崎藤村、有島生馬監修で、1922年6月号から『金の星』と改題し、1929年7月までに116冊を刊行した。『赤い鳥』以前に山本鼎を中心に自由画を募集したことに特色があった[7]。『童話』は、『赤い鳥』に影響を与えた絵雑誌『コドモ』、幼年雑誌『良友』を基礎に創刊された。上級の読者を想定して刊行され『赤い鳥』と一線を画した。千葉省三が編集を担当し、川上四郎の表紙画や小川未明の童話、西条八十の童謡を特徴とした。活発な投稿もあり『赤い鳥』と並ぶ雑誌に成長した[8]。

北原白秋は『赤い鳥』創刊について三重吉から相談を受けていた。彼は創刊号に「りす〜小栗鼠」を発表して精力的に童謡を発表していく。三重吉と決別する1933年まで『赤い鳥』誌上で投稿作品の選者となり、多くの童謡作家を育て、与田準一、巽聖歌、藤井樹郎、多胡羊歯、有賀連などの詩人が誕生した。童謡は『赤い鳥童謡集』全8巻としてまとめられ、第1〜第4集には成田為三、第5〜7集には草川信、第8集には弘田龍太郎の曲譜が収められた。

白秋は童謡を「童心童語の歌謡」と定義し、童謡論集『緑の触角』を公刊して新しく生まれた童謡の世界を導いた。白秋は、子どもたちの創作童謡のなかに「児童自由詩」と呼ぶべき作品を発見する。『鑑賞指導児童自由詩集成』で、「児童自身の作るところの童謡の投書」が増えてきたので「成人以外の児童作品欄を設け」、さらに投書を促して「特に秀抜なるものは推奨作として大いに優待」したと述べている。白秋は子どもの詩のすばらしさを発見し「児童詩における自由律」を主張して、これらの詩を「児童自由詩」と定義したのである。この提唱で、各地の小学校で児童自由詩の指導が活発になり、投稿児童数は急激に増えた。この中には山形県の金子てい、熊本県の海達公子などの多くの詩を入選させた子どもたちも生まれた。

三重吉も創刊号から子どもの綴り方を載せて「文章は、あったこと感じたことを、不断使つてゐるまゝのあたりまへの言葉を使つて、ありのまゝに書くやうにならなければ、少くとも、さういふ文章を一番よい文章として褒めるやうにならなければ間違ひです」（「選後に」1918・7）と論評して、「ありのまゝ」書くことの重要性を強調した。呼びかけに応えて多いときには全国から2千ほどの綴り方が集まった。後に『綴方教室』で有名になった豊田正子もいた。また、指導した教師たちに木村

不二男、木村文助、菊池知勇、平野婦美子という著名な教師も現れてきた。出雲俊江は『赤い鳥』綴り方について、「子どもを大人と同じ発信者として位置づけ、その場を提供したこと」をあげている。その場では、「子どもの書くことにおける言文一致体の創出が、従来の枠組みにとらわれない子ども自身の目線で見たものを、従来の文章形式や言葉にとらわれない子ども自身の言葉で書くこととして行われた」としている。しかもそれが「教育の側からでなく、文学における言文一致の担い手であった者によってもたらされた」ことに特色があるとする（『赤い鳥事典』、p. 458）。

児童自由画を選評した山本鼎も、「人の絵を真似して描いてはいけません」、「君たちが自分で見た実物、たとへば、お庭をご覧なさい。松の木だの、ダリヤだのふうせんかだの睡蓮だの八つ手だのいろいろの植木」という「実物を」「どしどし描くんです」と子どもたちを励ましている（「自由画を選んで」1920・10）。

（2）教養実践

三重吉は、白秋や山本鼎らと協力しながら作者や読者の参加を促す企画をいくつも用意した。作者や読者も三重吉たちの呼びかけに応じて互いに交流しながら、新たな実践に挑戦していた。『赤い鳥』誌面を飾った綴方や自由詩、自由画の創作は創作実践であり、作家志望者による文芸実践と同じく、子どもたちによる自覚的な創作と鑑賞の実践となった。これらは、誌面に示された教養を受け取りながら、文芸を創造し享受する、あるいは童謡や絵画を創作し鑑賞することで、さらにその後に生み出される再創造への可能性に自覚的になっていく実践となっている。また、その一連の過程で実行される精神的な営為のもとでの、未評価の作品を評価して共有しようとする提案的な実践でもあった。それぞれの実践は、実践知としての教養を提示している。それらは相互に影響しあいながら、またそのほかの実践に示された教養も吸収して、さらに新たな実践を展開した。その意味で、これらの実践は個々の実践の領域を超えた教養実践として展開したと考えることができるのである。その意味で、『赤い鳥』の実践は教養実践そのものであったのである。

三重吉の編集姿勢の影響は戦後児童文学・文化雑誌などに見ることができる。旧制中学校時代に『赤い鳥』を購読して文学の世界に入った藤田圭雄が編集責任者となり、『赤い鳥』後継誌として『赤とんぼ』を創刊する。藤田は、創刊の辞で「赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のことのやうに覚えている。われわれの今度の仕事を通じて子供の世界にもう一度輝かしい文芸復興の時が将来（マヽ）されたならその喜びは限りない」と述べている。大仏次郎、川端康成、岸田國士、豊島与志雄、野上彌生子らが名を連ねた。『赤い鳥』で成長した坪田譲治による『びわの実学校』（1963〜1986、第2期は季刊、第3期は『びわの実ノート』）にも『赤い鳥』の影響がみられる。坪田は「『びわの実学校』創刊まで」（『坪田譲治全集』第12巻、新潮社、

1978、p. 354）で「『赤い鳥』は大正から昭和へかけ、二十年もつづき」「童話と童謡と綴方と自由詩と、この四つのものに新風を吹きこみ、わが国の児童文学に、不滅の功績を残し」たと評価している。そして、「今、子供のための童話雑誌は、この何千万人か子供のいる広い日本に、ほとんど一つもな」く「面白くてたまらない童話雑誌をつくらなければ」と思うばかりだったと回想している。

（3）教養実践の後世への影響

戦後、『赤い鳥』の作家・画家・音楽家などの顕彰活動が始まった。白秋をはじめ、与田準一など『赤い鳥』に育てられた作家・詩人たちが顕彰されている。これらの活動は、記念館や資料館を舞台に展示会や研究会を組織して、子どもたちや市民から童話・童謡・詩などの公募活動であるのが特徴である。それは『赤い鳥』の実践を後継するものであり、戦後の教養実践となった。

広島県では中国新聞社主催の鈴木三重吉賞が 2019 年で 71 回を数えた。中国地方の小中学生を対象に作文と詩を募集しており、作文 1,410 点、詩 2,479 点が集まった。福岡県柳川市では、北原白秋生家・記念館の顕彰活動として白秋献詞を公募している。白秋の業績を偲び「見たり聞いたり、感じたりしたことを自由詩に表現することによって、詩に対する理解と関心を高め」ることを目的として始められ、2018 年 11 月は総数 8,825 編の応募があった。

新美南吉記念館（愛知県半田市）の新美南吉童話賞公募が 2018 年で第 30 回を数える。自由創作部門一般 958 編、中学生 565 編、小学生 124 編・新美南吉オマージュ 300 編の合計 1,947 編の作品が全国から寄せられた。新潟県南魚沼郡湯沢町では、疎開後に同町に居住した童画家川上四郎の顕彰として、湯沢町公民館での作品展示とともに、「越後湯沢全国童画展」（実行委員会、湯沢町、湯沢町教育委員会主催）が開催され、2018 年の越後湯沢全国童画展第 22 回公募には 261 点の童画が全国から寄せられている。童画美術館（仮称）建設計画も進行している。川上四郎の出生地である長岡市には、長岡市立中央公民館川上四郎文庫が展示を行っている。

新潟県上越市の小川未明文学館は、2018 年の第 26 回小川未明文学賞に 476 編の応募があり、愛知県刈谷市では、森三郎童話賞が 2005 年より 3 年ごとに募集され、毎回応募数 500 前後を数え、2017 年に第 5 回となった。綴方教師として木村文助が教鞭をとった北海道北斗市（旧亀田郡大野町）の北斗市郷土資料館に「赤い鳥・木村文助コーナー」があり、大野文化財保護研究会が通信『木村文助研究』の発行を続け、2014 年に 30 号で終刊した。木村が刊行した文集に学び、作文を募集して『新・村の子供』（2004）を発刊した。東京都日野市では、巽聖歌「たきび」を顕彰して日野市たきび祭（旭が丘商工連合会主催）が開催され 2018 年で第 13 回となった。日野市郷土資料館では、前夜祭でおはなしと朗読・歌のつどいが開催されている。

こうした顕彰活動は管見の一部であり、このほかにも大小さまざまな研究会や展示、公募がある。これらのすべてが『赤い鳥』の影響というわけではないが、少なからぬ活動に『赤い鳥』が関与しているのも事実である。

5　おわりにー今後の課題ー

『赤い鳥』が発行されたのは貧困や格差､戦争の準備が進行する時代であった。『赤い鳥』は華やかな意匠で語られやすい。しかし、実際に展開された教養実践は地道な文章表現指導、童謡実践、自由画創作実践であったのであり、目の前の子どもたちを主体的な市民として育てる対抗文化の運動であった。100 年前の児童雑誌の出現は、国家的管理に明確に対抗する自由主義の意義を鮮明にした。

現代の子どもたちも、格差と貧困の拡大、管理と強要の教育のもとにある。子どもたちには、自由を謳歌し主体性を育てる環境が必要になっている。SNS が生活の道具として位置づけられるようになった今日、三重吉らが生み出した対抗文化のための新しいメディアを誕生させるのは私たちの責任である。『赤い鳥』の 100 年は、文学研究を志す私たちにそのことを教えてくれている。

＊本稿は研究課題の性質上『赤い鳥事典』所収拙稿と記述の重複があることをお断りする。

注

1　奥付に、発行所は「通称目白上り屋敷」の「赤い鳥」社、住所は三重吉の自宅で、東京府北豊島郡高田村 3559。現在の豊島区目白 3 丁目 17 番地付近。江戸時代の狩猟場休憩所「上り屋敷」が通称の地名として使用された。

2　1925 ～ 1930、文園社。小砂丘忠義、上田庄三郎、野村芳兵衛、峰地光重等の編集。後継誌は小砂丘の『綴方読本』。童話・詩、児童詩・綴り方とその選評が中心で、定価 5 銭と安価で多くの読者を獲得した。

3　『赤い鳥』の研究は､日本児童文学学会編『赤い鳥研究』(1965) 以降に本格化した。中内敏夫『生活綴方成立史研究』(明治図書、1970)、藤田圭雄『日本童謡史』(あかね書房、1971)、桑原三郎『「赤い鳥」の時代―大正の児童文学―』(慶應通信、1975)、冨田博之『日本児童演劇史』(東京書籍、1976)、滑川道夫『日本作文綴方教育史』(国土社、1977 ～ 1983)、弥吉菅一『日本児童詩教育の歴史的研究』(渓水社、1989)、日本児童文学学会編『研究＝日本の児童文学』(東京書籍、1995 ～ 2003) などの重厚な研究が続いた。

4　賛同作家には、第 2 号から小川未明、谷崎潤一郎、有島武郎、第 6 号から久米正雄、江口渙、秋田雨雀、西条八十、菊池寛、三木露風が加えられた。

5　この時期の子どもの生活は、加藤理「『赤い鳥』が照射する光と影ー『赤い鳥』の時代と「児童文化格差」の誕生―」(『研究　子どもの文化』20 号．pp．2-20) に詳しい。

6　続橋達雄『大正児童文学の世界』おうふう、1996、p．29

7　芸術性とともに、教訓性、子どもらしさを重視して､『赤い鳥』と差別化を図ろうとした。「七つの子」(野口雨情)、「菜の花と小娘」(志賀直哉) などが知られる。

8　木元平太郎、千葉省三等編。沖野岩三郎、宗谷泰三、宇野浩二、小川未明、佐藤春夫、有島武郎らが寄稿した。千葉省三の創作童話は、戦後児童文学の確立にも貢献した。